
くもの巣キャンディー

昼寝日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くもの巣キャンディー

【Zコード】

N4416M

【作者名】

昼夜日和

【あらすじ】

くもが巣をはるよつて、私はキャンディーを売るの。

くもが巣をはるよつて、私はキャンディーを売るの。

陸は飴売りの女の子の言葉を聞いた。

女の子は路かたに小さな折りたたみ机を置き、その上にくもの巣キャンディー入りの小さな袋を並べている。

くもの巣キャンディーはくもの巣の形をした小さな飴で、机の上に並べられた袋の中に数個ずつ入っていた。

「一つ、ちょうどいい」

陸はポケットから代金を出して女の子に渡す。その時女の子が言ったのだ。

「ふうん、くもが巣をはるよつて、私はキャンディーを売るの。

興味のないよつて呟くと、陸は小さな袋を受け取り、くもの巣キャンディーを一つ口に入れれる。

ふわりと、甘い香りが口いっぱいに広がった。

陸は女の子に笑いかけ、おいしい、なつかしい味がするよ、と語りかける。

飴売りの女の子はつづむきがちにポツンと言つた。

とうぶんの聞、じこでくもの巣キャンディーを売ることにしたの。気に入つたなら、また、来て。

+

女の子は言葉のとおり翌日も、その翌日も、その翌々日も、同じ場所に同じように小さな袋を並べていた。

陸は毎日一袋ずつ、女の子からくもの巣キャンディーを貰つ。お世辞ではなく本当に嬉しいしかったのだ。

女の子はくもの巣キャンディーの入った袋をお密さんへ渡す時、

それが初めてのお客さんでも陸のようなお得意さんでも、必ず「いつもくもが巣をはるよ」、私はキャンディーを売るの。

ある人は陸のように、「ふうん」と無関心に相づちを打つた。

またある人は不思議そうに、それはどうこいつ意味ですかとたずねた。

またある人は神経質そうに、わけのわからんことを言つなど怒り出した。

飴売りの女の子はそのどれにも答えない。

くもの巣キャンディーを渡してしまったら、あとはうつむいてじつとしている。

おいしいよ、とか、また来るね、などと言えば、女の子はうつむいたままにありがとうございます、とか、待つてます、などと返した。

陸はいつも買つたくもの巣キャンディーを女の子の隣で食べた。

一個だけ食べて立ち去る時もあつたし袋の中にある飴をすべて食べてもまだ女の子の隣に居座ることもあった。

陸はうつむく女の子の隣で、行きかう人々を眺める。

人々の中には時々、足を止めてくもの巣キャンディーを買つたり、ただ冷やかして行つたりする人もいた。けれどほとんどは女の子のこと、折りたたみ机に並ぶくもの巣キャンディーのことにも気がつかないようで、迷いなく歩いていく。

飴売りの女の子はくもの巣キャンディーを買つたすべての人に対する言つた。

くもが巣をはるよ、私はキャンディーを売るの。

+

雨の多い時期になつても、女の子は毎日同じ場所にいた。
大きな傘で雨から商品を守り、女の子の方は、傘は差さずに合羽を着ている。

陸は相変わらず毎日くもの巣キャンディーを買い、餡売りの女の子の隣で餡を食べながら道行く人々を眺めた。

雨降りの日や今にも雨が降つてしまいそうな日は、行きかう人の量がぐつと減り歩調が速くなる。

陸は甘くてなつかしい味のするくもの巣キャンディーを含みながら、餡売りの女の子に話しかけた。

「よくやるね。いつも雨が降つてちや、そんなに売れないんじやないの？」

毎日やって来るお客さんがいるから。

ぽたりと、女の子は隣にいる陸にだけ聞こえるような小さな声で言つ。

「おいしいからね、これ」

ふいに足早だつた歩調がゆるんで、立ち止つた。通りがかりの人は、折りたたみ机の上にある最後の袋を手に取る。

女の子は代金を受け取つて、呟くように言つた。

くもが巣をはるよつて、私はキャンディーを売るの。

+

餡売りの女の子が、くもの巣キャンディーを卖つていなかつた。いつも餡を売つている所で、大きなリュックを背負い、うつむいて立つてゐる。手にはガラスのビンが握られていた。

陸が近付くと、女の子はゆっくりと顔を上げる。ほおが腫れていった。

「それ、どうしたの？」

お世話になつていた家の人があ……。

女の子はそれだけ言つとうつむいた。

「なにがあつたのさ？」

女の子はうつむいたまま何も言わない。陸がもう一度たずねようと口を開きかけた時、聞き洩らしてしまいそうなくらい小さな声が

した。

くもの巣キャンディーを作るくもがいて、それの入ったビンを、お世話になつていた家の人が壊してしまつた。くもが一匹逃げてしまつたので怒つたら、殴られた。

雨は降つていないが、雲が何重にもなつて空を覆つてゐる。

本当は、と女の子はビンを見つめながら一段と小さな声で言つた。本当は、このくもたちはみんな不良品として処分されるはずだつた。でも、くもの巣キャンディーそれ自体には何の問題もないのに処分してしまうのはおかしいと思つた。だからこつそりと、くもの巣キャンディーを作るくもたちを持ち出した。処分予定のくもが消えてしまつて当然のように騒ぎになつてしまつたけれど、見つかつて没収される前に生まれ故郷を出た。その時初めて、私は生まれ育つた土地から出たの。以来ずっと、飴売りとしていろんな所を転々としている。

「ここを出て、また違う所に行くんだね？」

陸が確認するように言つと、女の子は小さくため息を吐いた。

くもが巣をはつてその場に落ち着くよつて、私はキャンディーを売つて一所に落ち着きたかつた。なのにここでも、ここの前の土地でも、それ以前のどの場所でも駄目だつた。

女の子は陸に、持つていたガラスのビンをつき出す。ビンの中には小さなくもが一匹、ひょこひょこと動いてゐる。先ほどとは打つて変わり女の子はきつぱりと言つた。

これ、くもの巣キャンディーを作るくもなの。一匹だけあげる。「いいの？」

驚いた様子の陸に、いつも来てくれたからと小さく笑つた。

陸がおずおずとビンを受け取ると女の子は言つ。

くもが巣をはるよつて、私はキャンディーを売るの、ヒ。

街から飴売りの女の子がいなくなつた後も、陸は毎日くもの巣キャンディーを食べ、行きかう人々を眺めた。飴はいつ食べても甘くなつかしい味だった。

様々な人が道を歩く。

たまに陸の目の前で歩みを止め、くもの巣キャンディーはもう売つてないのかとたずねる人がいた。

「飴売りの子は他の街に行ってしまったよ」

そう返して、持っているビンの中を確かめる。くもがビンの中で巣を作つていれば「飴売りじゃないけど、あるからどうぞ」「くもの巣キャンディーを渡すし、巣を作つていなければ『残念だけど、くもの巣キャンディーはないよ』と言つて首を振つた。

くもは一日に数個の巣をはる。陸はそれを全部一人で食べることもあれば、声を掛けてきた人に分けることもあり、翌日の分にと取り分けておくこともあつた。

陸は毎日、道行く人々を眺めながらくもの巣キャンディーを食べる。

+

日差しが強く暑い日が続いた。

くもは一日に作るくもの巣の数をじわじわと減らしていく、時には丸一日、全く巣を作らない日もあるくらいだつた。

陸は、くもが巣を作らない日にはガムを噛む。なつかしい味はないけれど、なじみ深い味のするガムだつた。

口をもごもごと動かしながら、陸は街の人々を眺める。

行き先を見すえ迷いなく歩く人々、ぼんやりとした表情で、まるで何かに誘い出されたかのようにふらふらとしている人たち、それから陸のことをじつと見てている男の子……。

男の子は陸と目が合つと、小走りで陸に近付く。

ねえ、あんた、いつもここにいるよね？

ソプラノの声で元気よく言つ男の子。

「いつもじゃないけど、まあ、たいていはいるかな
何やってんの？」

「見てるだけだよ。歩いている人を見てるだけ
見てるだけ？ なんで歩いてる人を見るの？」

「特に理由はないかな」

「退屈でしょ？」

「そうでもないよ。この人たちみんな、一体どこに向かって歩いているんだろう？ 一体このうちの何人がこの街から出たことがあるんだろう？ なんてことを考えていると、あつといつ聞に時間が過ぎていてるからね」

それって、暇つてことだよね？ だったら一緒に遊ぼうよ。

「悪いけど、ここから動く気はないんだ。退屈してるなら友達のところへでも行つておいで」

男の子は口をすぼめた。陸はガムを噉みながら、視線を街の人々に戻す。

「最近、なんか変じゃない？」

口をすぼめたまま、男の子は不機嫌そうな声を出した。

「変？」

だつてさ、ノラ猫とかスズメとか、なんか見かけなくなつたしさ。

「ふうん」

たまに、すつじぐ甘い匂いとかするし。

「ふうん」

男の子は黙つた。

陸もしゃべらない。ただ、道行く人々を眺め続けた。

しばらくどちらも口を開かなかつたが、声変わり前の幼い聲音で男の子が尋ねる。

「何食べてるの？」

「ガムだよ。食べる？」

男の子は陸からガムを受け取り、口に入れた。

「おいしい？」

「まずい。ひどい味だよ、これ。

顔をしかめてすぐに吐き出してしまう。

陸は肩をすくめた。

+

くもの巣キヤンディー、今田はあるかい？

そう聞かれて陸はビンの中を確かめた。くもは巣を作っている。

「ちょっと待つてね」

陸はビンの蓋を開けようとして、ふとその手を止めた。

「ねえ、なんか甘い香りがしない？ まるで飴みたいな……」

吸い寄せられるように、陸は打ち捨てられた傘に目を向ける。ところどころ穴があき、人に使われることなく放置され、傘はボロボロになっていた。

その、ひっくり返ったボロボロな傘の内側に大きなくもの巣がはりついている。陸はそっと巣に触つてみた。

甘い香りのするくもの巣は、固く、陸が軽く触つただけでは崩れない。

「これ、くもの巣キヤンディーだよ」

くもの巣キヤンディーはあるかと陸にたずねた人も、つられてくもの巣に触れる。袖の下からチラリと、上品そうな金の腕時計がのぞいた。

「そういえば、飴売りの子が言つてたな。一匹、くもの巣キヤンディーを作るくもが逃げてしまつたって。たぶん、そいつがこのくもの巣キヤンディーを作つたんだ」

ぱきりと音がした。

金の腕時計の人があし入れすぎて、傘の内側にできていたくもの巣キヤンディーを割つてしまつたのだ。

陸のくもの巣キャンディーを作るくもは少しづつ元気をなくしていく。

以前ほど活発に動かなくなつたくもを、陸はガラス越しに見つめた。

「小ちいものの巣キャンディーしか作らないのは、小さなビンの中にいるからなのかな？」

ひとり言のようにも、くもに向かつて語りかけていくようにもとれるふうに言うと、陸はガラスのビンの蓋をそつと開ける。そして小さなくもの巣キャンディーを取り出すと、隣の男の子に渡してビンの蓋をしっかりと閉める。

くもの巣キャンディーを手にした男の子は残念そうに、くもを外出せないんだ？ と言つた。

「外に出したら逃げてしまつよ」

でも、大きなくもの巣キャンディーを作るかもしれないよ？
「あんまり大きいと、食べきれないだろ？」

リクは夢がないなあ。

言つて、男の子はくもの巣キャンディーを口に入れると

「おいしいかい？ ソワ」

めちゃくちゃうまい。ガムとは比べ物になんないよ。

満面の笑みで飛び跳ねる。

陸は空とこゝの男の子がはしゃぐのを見て、軽く肩をすくめた。

まもなく、街のあちこちで甘い香りがするようになつた。

もともと少なかつたけれど、陸にくもの巣キャンディーのことを問い合わせてくる人はさらに減り、通りがかりの人にくもの巣キャンディーを分けることもなくなつた。

ねえ、リク。やつぱり変だよ。

空はくもの巣キャンディーを舌で転がしながら、隣でガムを噉む
陸に言った。

「変?」

だつてほら、歩いてる人たちが、みんなぼんやりしてるし。
「ふうん」

なんか、さ。甘い香りに誘いだされましたって感じ? 足元ふら
ふらしてるし。絶対、変。

「ふうん」

空は少し黙る。大きなため息をひとつすると、リクはきっと大物
になるよ、きっとね、と言つた。

「ふうん」

陸は無関心に粗づちを打つと、ビンの中を確認する。

「ところでソラ、くもの巣キャンディーが出来てるけど、食べる?
食べる。後で食べる。だから取つておいて。

「はいはい」

陸は肩をすくめた。

+

人だからができているのを、陸は見つける。

「これは一体、なんのさわぎ?」

人だからに近づいてたずねると、飴で出来たくもの巣に人がひつ
かかっているみたいなんだと答えが返つてくる。

陸は人と人の間から覗き込もうとしたが、あまりにも人が多すぎ
てうまくいかない。

強く甘い香りが立ち込めていた。陸がかろうじて見ることができ
たのは、だいぶ大きくなっているらしいくもの巣と、それにから
めどりれている、上品そうな金の腕時計のはめられた手だけだった。

くもの巣キャンディーを食べながら、陸は路かたで街の人々を眺める。

行きかう人々の中で陸のことを気にとめる人はいないし、珍しく空もやって来ない。

街中にはうつすらと甘い香りがただよっていた。

「……退屈だな」

どこかぼんやりとした様子で歩く人たちを眺めながら、陸は小さく呟く。くもの巣キャンディーは口の中でじわじわと溶けていき、なつかしい余韻を残しながら消えた。

何やってんの？

唐突に空の言葉を思い出す。ガムを噛むとなつかしい余韻は消えて、かわりになじみ深い味が広がる。

「……何やってるんだろう、ね」

呟いて、軽く肩をすくめた。

+

空に手招きされ、陸は人気のない路地裏へ入っていく。

「どこまで行くのさ？」

陸が聞くと、空はいたずらっ子の笑みを浮かべて答えた。
もう、すぐそこだよ。すぐそこにさ、すつじいのがあるんだ。
甘い香りが濃く漂つている。陸はくらくらとする頭を軽く押さえながら空に続いて行き、それを見た。

空は、それをよく見ることもせず、すぐに振り返つて胸を反らせる。

「……

陸は口を開きにしたまま、何も言えなかつた。

「……

陸は口を開きにしたまま、何も言えなかつた。

得意げな空の背後には甘い香りのするくもの巣が、道いつぱいに
はり巡らされ、通路をふさいでいる。

巨大なくもの巣キャンディーをよく見ずに、すぐこちらを振り返
った空はおそらく気が付いていないが、陸は大きな大きな巣にへば
りつく、空よりも一回りほど大きいくもに目を奪われていた。

巨大なくもは音も無く巣の上を移動して、空に接近する。空のす
ぐ後ろまで来るとピタリと止まり、ゆっくりと体を縮めた。

巨大なくもが何をするつもりなのかわかつた陸は、思いつきり空

を横に突き飛ばしてから、あわてて反対側に飛ぶ。

突き飛ばされた空が驚いた顔で陸を見た。陸には空がゆるりゆるり
と地面に吸い寄せられていくように見える。倒れた途端に、なにす
るんだよと怒り顔になつたけれど、二人の間に割つて入ってきた巨
大なくもせいで陸から空は見えなくなつてしまつ。

「ひつちだ」

陸は言つた。しかし空の悲鳴にかき消され、誰にも届かない。巨
大なくもは空に狙いを定めたようだつた。

落ちている壊れた傘をつかむと、陸は背を向けている巨大なくもに
全力で振り下ろす。

ばきん、と音がした。巨大なくもはあつさりと割れて、動かなくな
つた。

陸も空も、割れて動かなくなつた巨大なくもを呆然と見つめる。

+

巣を全くはらなくなつてから間もなく、陸の小さなくもは動かな
くなつた。

なじみ深い味のするガムを噛みながら、陸は街の人々眺める。

くもの入ったビンを軽く振るとカラソコロン、ガラスと何か固い
ものがぶつかり合つのような涼しい音がした。くもはやつぱり動かな
い。

それ、どうするんだよ？

空の言葉に陸は考へるそぶりを見せる。

「うーん、もうくもの巣キャンティーは作らないしなあ……。ソラ、これ、欲しいかい？」

リク、いろいろからつて押し付けようとしたじゃないか？
「いや、そんなことはないよ。ソラがこらいいんだつたら捨ててお
くねじ」

空は陸に手のひらを出して、言つた。

「いむ。欲しい。ちようだい。」

陸は軽く肩をすくめると、くもの死骸入りのビンを空に手渡し、思いついたように囁いた。

「くもが巣をはるよ、ソラ。私はキャンティーを売るの」
何それ？

空はキヨトンとして、それから吹き出す。

リクは別に、キャンティーを売つてるわけじゃないじゃん。

「ソラのくもを譲つてくれた飴売りの女の子が、よく言つてたんだ
べー。」

ビンをぐるぐる回して動かないくもを夢中で観察する空は、どことなく気の抜けた声を出す。いろいろな角度からくもを観察してから、思つ出したように口を開く。

でもまあ、リクって飴を売つたり巣をはつたりするタイプじゃない
と思つよ？

「え？」

あ、なんとなぐだよ？ なんとなくなんだけどね、もしリクがく
もだつたとしても、巣なんかはないで、ひひひひと動き回るタイプ
なんじやないかなーつて思つ。たぶんさ。

「……ふうん」

無関心そうに相づちを打つ陸は、空はニカリと笑つた。

行きかう人々の足取りに迷いはない。

陸はガムを噛みながら、ゆつたりと道行く人々を眺めていた。

「ガム、食べるかい？」

陸の隣でじつとしていた空は、ガムを受け取つて口に入る。

「どう？」

やつぱりますい。

顔をしかめるが、今回は吐き出さずに噛み続ける。

陸は軽く肩をすくめると荷物の詰まつたリュックを背負い、行く先を見すえて歩く人々の中にはじつた。

大きく手を振る空を後ろに、陸は街の出口へと向かう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4416m/>

くもの巣キャンディー

2010年10月28日07時47分発行